

# 今の私が存在するまで・・・ そして、これからも存在すること

DOWAホールディングス株式会社

代表取締役会長・CEO 吉川廣和



一室の奥行きが140m 壁のないフリーアドレスのオフィス。

## 末っ子で奔放な子供時代

群馬県の片田舎の6人兄弟の末っ子として私は生まれました。私たち6人の兄弟には、厳しい親父に順送りに課せられた仕事がありました。それは養蚕の餌である桑の葉を、桑籠いっぱい摘んでくるということでした。末っ子の私は、時間がなくなった時には籠の中ほどはすかすかでも外目はぎっしりつまっているように見せるなどの要領で、兄には負けん気を発揮していました。

他には朝の仕事として玄関・庭を掃き清めるのが私の役目でしたが、どこの家でも家族全員が働き手だった時代ですので苦とも思わず、それを当たり前の事としてやっていました。当時はどの家の暮らしも貧しいものでした。しかし山には木の実や山菜があり、川にはその習性を知らないければ釣れない魚がいて、畑にはたわわに実ったトマトやきゅうりがたくさん有り、そんな豊かな自然に囲まれて私たちは育ったのです。よその家の畑の作物を拝借し、空腹と渴きを癒し、田舎だからこそその大きさを味わったものでした。

## 勉強は寝転んで

朝は家の手伝い、放課後も手伝いと遊びに忙しかったため、とりたてて勉強せずにほとんどのことは学校で覚えこみました。ただ、本を読むことは幼いころから大好きで、そうなれたのも教員をしていた姉のおかげかもしれません。本を読むといつても兄弟も多く自分の部屋などあるはずもなく、家の中の空いている場所にみかん箱を机がわりに置いたり、そこに寝転んだり、いたるところを読書スペースとして学校の図書室の本を読みあさっていた記憶があります。

今思うと、この体験が後にDOWAホールディングスの本社移転やフリーアドレスの導入の発想を生むきっかけだったのかも知れません。いつ、どこでも、集中できる力を持ち、臨機応変に対応できる。そんなことを幼い頃に知らず知らずに身に付けていたのだと思います。そして著書「壁を破る」の表紙を飾る約140Mにも及ぶ長さ個々の机などない、大きな壁のないオフィス、事務所の発想に繋がったのだと思います。

## 大学時代の経験が私の転機

高崎高校から東京大学に進んだ私は教育学の学者を目指しておりました。ある会社の社長宅に書生として置いていただき、家庭教師をする傍ら東大消費生活協同組合で働いてもいました。そこでは学生役員として、組合員から持ち込まれた苦情を処理したり、まさに経営者のようなことをしていたのです。住込み先の社長にある日、「君は学者より経営者に向いているんじゃないか」と言われたこともあったぐらいで、大学

卒業後の進路についてはかなり悩んだものです。というのも、学業の傍ら、トルストイやマルクス、それに今でも読み返すことのあるサルトルなどの哲学関係の本を読みふける一方、子どもの非行問題にも興味を持ち、その研究のため大学院へ進むことも視野に入れていたからでした。また、マスコミにも興味があつて、そちらの就職活動もしましたが、全部落ちました。そんな折、ひよんなきつかけで入社に至ったのが当時の同和鉱業でした。その縁は奇しくも厳格であつた父にあつりました。その当時、福田赳夫氏の地元後援会の役員を務めていて、その秘書から、同和鉱業で「東大卒の学生を探している」とのことを耳にした父は、親ばかりで縁を取り持ったようです。とはいえ常々、理不尽な事に対しては兄であれ、年上の人でもあつてもかかつていく、そんな反骨精神を貫く私の姿をむしろ微笑ましく思つてくれ、だけれども反対に人を見下さうものなら厳しく戒めてくれたあの父の「同和鉱業で自分を試してみたら」が決め手になりました。

そして、知らず知らず培われてきた“人に動いてもらう術”と“上に対する反骨精神”“それに”下に対する労りの心”を親からもらつて私は同和鉱業の現場へと身を投じていくことになるのです。

以下 第2回へ続く



吉川廣和(よしかわひろかず)1942年生まれ。1966年3月 東京大学教育学部卒業。モットーは平常心是道(自然体)。趣味はスポーツ全般、散策。